

とくぞうあな

徳造穴

箕浦みのうらの滝たきの下したに、オオニシ山やまが海うみに迫せまってそそり立たっている所ところがありました。鉄道工事てつどうこうじ（大正五年たいしょうねん（一九二六）開通かいつう）のときにおおおおけずけずに大きく削りとられて、今いまでは地層ちそうをむき出しにして絶壁ぜつぺきになっていますが、昔むかしはそこに徳造穴とくぞうあなと呼ばれる洞穴ほらあながあったそうです。

この洞穴ほらあなに魔法使まほうつかいの徳造とくぞうという大盗賊だいたうぞくがいました。また、追おいはぎも出でて道行みちゆく人ひとを襲おそったそうです。だから、ここを通とおるときには、滝たきの下したの東ひがしの入口いりぐちにあたるニレの大木たいぼくのところや西にしの鳥越とりこえで、一休ひとやすみして人ひとを待まち、連つれだつて足早あしはやに通とおり過すぎたそうです。

そのころ、丸亀藩まるがめはんに捕とり縄なわ（はやなわ）の名人めいじんがいました。この名人めいじんが徳造とくぞうを召めし捕とろうとしましたが、たびたび追おいつめては取とり逃にがして悔くやしがっていました。

こんどこそはぜひとも引ひつ捕とらえようと、滝たきの下したまで徳造とくぞうを追おいつめてきましたが、また、どこかへ隠かくれてしまいました。

「天てんの上のぼることなし、地ちにもぐることもなし……」

と思案しあんにふけつていと、

「だんな、どうしたんですか。」

と、通りかかった余木村よきむらの漁師りょうしが尋ねました。

「徳造とくぞうを追いつめて、いま一歩ほというところで取り逃にがしたのだ。」

と、いかにも残念ざんねんそうな顔かおをしますと、漁師りょうしが、

「だんな、徳造とくぞうは魔法まほう使いですよ。あれをごらん下さい。いま海うみは上げ潮しお

(三崎みさきの方ほうへ流れる)だというのに、あのさんだわらこめだわら(米俵りょうはしの両端りょうはしに

あてる丸まるいわら作りづくのふた)は潮しおの流れながとは逆ぎやくに下くだって流ながれております

よ。徳造とくぞうはきつとあのさんだわらこめだわらに乗のっているにちがいありません。」

と、沖おきに浮うかんでいるさんだわらゆびを指ゆびさしながら低ひくい声こえでいいました。

これを聞きいた名人めいじんは、目めをきらきらと輝かがやかせて、さんだわらこめだわらをにらんでいましたが、

「エイッ！」

と一声こえ、さんだわらめ目がけて縄なわを飛とばすと、さしもの大盗賊だいたうぞくも名人めいじんにはかなわず、遂ついに捕とらえられてしまいました。



「ありがとう。おかげでぬすつとを捕らえることができた。何かお礼をしたいのだが、なんでも言ってくれ。」
と言うと、

「ほかに欲しい物はありませんが、ただ一つ、余木の漁師が箕浦の海に漁にこられるようにできたらたいへんうれしいのですが。」
と、漁師は捕り縄の名人に頼みました。

さつそく、名人が丸亀藩の役人に願い出たので、それから明治の始めのころまで、余木の漁師は箕浦の方へ漁にくることができたということです。